The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

唐・知恩『金剛般若経義記』の作者について

蕭　文真

1．はじめに

唐・知恩『金剛般若経義記』（以下『義記』）は，義天（1055–1101）『義天録』（T55, p. 1167b），興隆（1691–1769）『仏典疏鈔目録』[1] に言及があるのを除き，他の文献に関聯する記録がなく，法蔵 P. 2159 号敦煌本が発見されるまで散佚したものと考えられていた．また，P. 2159 号敦煌本に書写されるのは上巻のみであり，この疏の完全なるテキストではないため，特に知恩の生涯については知る術がない．

『義記』の作者の問題については，これまでに落合俊典氏が研究を行っている[2]．その中で氏は，円行（799–852）『霊巌寺和尚請来法門道具等目録』（839）（以下『霊巌録』）所収の塵外（–737）『金剛般若経依天親菩薩論讃釈疏』（以下『論疏』）二巻をこの『義記』ではないかとしつつも，最終的な結論は下していない．また，平井宥慶氏や南権熙氏は，作者は知玄（809–881）である可能性を指摘する[3]．

『義記』についての現存する資料は非常に少ないものの，知恩『義記』の韓国清州古印刷博物館蔵本（以下清州蔵本）や高山寺蔵本の公開と復元により[4]，その全容が明らかとなった．さらに，杏雨書屋所蔵『敦煌秘笈』が近年公開されたことで，『義記』の註釈書である公哲『金剛般若経開玄鈔』（以下『開玄鈔』）巻二・巻三が新たな研究材料として加わった．本稿では，これらの新資料を利用しつつ，改めて『義記』の作者について検討を試みたい．

2．『義記』の作者について

2．1．知恩は知玄であるか否か

南氏および平井氏は知恩とは知玄のことであるという見解を示すが，その根拠は明らかにされていない．『義天録』や知玄の伝記資料から推測するに，以下の三点をその根拠としているのであろう．まず，『義天録』巻一に「義記二巻　知恩（或いは「玄」に作る．待勘）」（T55, p. 1167b）と見えること．次に，各種僧伝や

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

資料に知恩の名は見えず，近い時代に活躍した知玄が知られること．最後に，知玄の著作に『金剛経』の注疏があることである．

『義天録』とは高麗において『続蔵経』を編集・刊行する際に依拠した目録であり，『義天録』が『義記』の作者を知玄としていた可能性を完全に否定はできないものの，現存する高麗版『続蔵経』のひとつである清州蔵本『義記』が「知恩」に作ることから考えて，『義天録』をもとに『義記』の作者が知玄であるとするのは十分ではない．また，唐から五代にかけて作られた『金剛経』の注疏は何千にものぼり，その作者のすべてが僧伝や史料に記録されていたとも考えにくい．さらに，高山寺本『義記』はまた「崇聖疏」とも呼ばれている．現存する三本で作者は崇聖寺沙門を名乗っており[5]，『義記』の作者は崇聖寺に仕えていた時期があったはずであるが，知玄の伝記には崇聖寺とのつながりを示す記録はなく，『義記』の作者を知玄とするに足る根拠は存在しない．

2．2．『義記』作者は塵外であるか否か

落合氏は『大正蔵』第五五巻所収『霊巌録』の校注資料をもとに，塵外の『論疏』こそが『義記』ではないかと指摘する．さらに，『大周録』巻十五「偽経目録」に「校経目僧知恩」（T55, p. 475a）とあることから塵外，知恩とが同一人物である可能性を提示する．

『義記』のテキスト中の羅什訳『金剛経』には冥司偈「六十二字経文」が含まれており[6]，恵能『金剛経解義』では霊幽の入冥を「長慶二年」（822）（X 24, p. 530a）とする．敦煌文献に見られる「六十二字経文」で最も早い紀年を持つのは咸通九年（868）の『金剛経』の木刻板であり，写本ではS. 5534号「西川過家真印本」の天復五年（905）である．ここから判断して「六十二字経文」の成立はおそらく9世紀以降であり，『義記』が著されたのも9世紀を遡らないであろう．『大周録』が編まれたのは7世紀末であり，「校経目僧知恩」は『義記』の作者である知恩とは別の人物であると考えられる．

ここで経録，現存する『義記』のテキスト三種，『開玄鈔』より『義記』のタイトル，作者に関わる記述について，今一度確認しておきたい[7]．

1	『霊巌録』	金剛般若経依天親菩薩論讃釈疏一部二巻　崇聖寺沙門塵外撰（T 55, p. 1073a）
2	敦煌本『義記』	金剛般若経依天親菩薩論賛略釈秦本義記　西京崇聖寺沙門知恩集
3	『開玄鈔』	金剛般若経開玄記巻第二　釈崇聖疏略釈　蜀郡沙門公哲述[8]

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

4	『義天録』	（金剛般若経）義記二巻 知恩〈或作玄待勘〉述（T 55, p. 1167b）
5	清州蔵本『義記』	金剛般若経依天親菩薩論賛略釈秦本義記 西京崇聖寺沙門知恩集
6	高山寺蔵本『義記』	金剛般若経依天親菩薩論賛略釈秦本義記 西京崇聖寺沙門智恩述
7	仏典疏鈔目録	（金剛般若経）義記二巻 知恩述[9]

以上，タイトルに関わるところでは，『義天録』，『仏典疏鈔目録』および現存する三本の『義記』の記述が類似している．『霊巌録』では作者，書名，編述の形式などすべて異なっており，他の文献に見られる疏と同一のものではないであろう．つまり，塵外『論疏』と知恩『義記』は別のものである．

ここまで述べたように，『論疏』を記した塵外と『義記』を書いた知恩は別人であり，落合氏の仮説に従うことはできない．

2．3．塵外『論疏』と知恩『義記』の関係についての推論

タイトルによると，『霊巌録』は「依天親菩薩論讃釈疏」とあり，『開玄鈔』は「釈崇聖疏略釈」と記し，三本の『義記』では「依天親菩薩論賛略釈秦本義記」とある．

高山寺蔵知恩『義記』の版心には「崇聖疏」とあるものの，『開玄鈔』が『義記』を「崇聖疏略釈」であると記している点を考慮に入れると，『開玄鈔』のいうところの「崇聖疏」は知恩の『義記』ではない．宝達『金剛暎』が塵外のことを「崇聖法師」（T 85, p. 58b）と呼んでおり，『開玄鈔』は塵外『論疏』のことを「崇聖疏」と称していた可能性を否定できない．『開玄鈔』が『義記』を「崇聖疏」の「略釈」ととらえていることから推測して，知恩『義記』はおそらく塵外『論疏』の節略本であったのだろう．

3．おわりに

現存するテキスト，経録，知恩『義記』の註釈書である公哲『開玄鈔』に記録されるタイトルや作者に関する資料を比較分析した結果，『義記』を著したのは知恩その人であることが明らかとなった．知恩が知玄や塵外とは別の人物であることは間違いなく，塵外と同様におそらく崇聖寺に身を置いていたと思われる．知恩『義記』は塵外『論疏』ではなく，その節略本であろう．『義記』の巻末には「欲求広解，応尋大疏」[10]と見えるが，「大疏」とは塵外の『論疏』を指すのかもしれない．また，『義記』の疏文中の「解云」とは塵外の解の可能性がある．

塵外は法相宗で重んぜられる天親『経論』に基づき，『金剛経』に疏釈を加えた．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

知恩はさらに塵外の『論疏』の節略本を作ったが，その理由は二つ考えられる．ひとつには『義記』巻末に「略示初学之門，故此粗為科釈」[11] と述べる通りであり，塵外『論疏』が学術的な注疏であるのに対し，知恩は初学者のために『金剛経』の簡易な疏を作らんとしたのである．崇聖寺にはすでに塵外『論疏』が存在したが，それは法相宗の思想を代表する天親『経論』に基づき作成されたものであったがために，知恩はそれを利用したのである．またもうひとつには，塵外『論疏』が依拠する経本は天親『経論』に用いられていた魏本『金剛経』であったはずで，『義記』がタイトルに「秦本」の二文字を加えたのは，おそらく秦本が流行したのち，知恩が崇聖寺の先輩僧である塵外『論疏』に修正を加え，時代の要求に応えんとしたためであると考えられるのである．

〈付記〉資料の閲覧調査にあたっては北海道大学名誉教授石塚晴通先生，国際仏教学大学院大学教授落合俊典先生，慶北大学校南権熙先生，東国大学校崔鈆植先生にご高配を賜りました．記してお礼申し上げます．また高山寺当局，韓国古印刷博物館当局から特別の御配慮を頂きましたことに感謝申し上げます．

1）『大日本仏教全書』巻一「仏教書籍目録第一」（東京仏書刊行会，1913），120 頁．
2）「唐代における金剛般若経の註釈書について」（『宮沢正順博士古稀記念 東洋――比較文化論集――』青史出版社，2004），387–400 頁．
3）平井宥慶「敦煌文書における金剛経疏」（阿部慈園編『金剛般若経の思想的研究』，春秋社，1999），266 頁．南権熙『高麗時代記録文化研究』（清州古印刷博物館学術叢書 2，2002），164 頁．
4）拙著『唐・知恩金剛般若経義記研究』（台湾中正大学博論，2013），212–255 頁参照．
5）注 4 同論文の 122，146，194 頁参照．
6）注 4 同論文の 183 頁（清州蔵本『義記』），205 頁（高山寺蔵本『義記』）．
7）表中の 2，4，5 は注 4 同論文の 122，146，194 頁参照．
8）杏雨書屋『敦煌秘笈』第七冊所載『開玄鈔』第二巻首題．『開玄鈔』と『義記』のふたつのテキストを比べてみると，『開玄鈔』には逐一『義記』の疏文が引用され，個別に注解が加えられていることが明らかで，『義記』の注釈書であることがわかる．よって「崇聖疏略釈」というのも知恩『義記』のことであると考えられる．
9）注 1 に同じ．
10）注 4 同論文，192 頁．
11）注 10 に同じ．

〈キーワード〉 知恩『金剛般若経義記』，塵外『金剛般若経依天親菩薩論讃釈疏』

（台湾中正大学中文大学院修了，PhD）

NII-Electronic Library Service